

いちご「女峰」の半促成栽培について

1. 試験のねらい

女峰は促成栽培に最も適するが、2～3月に商品価値の高い果実が得られる半促成栽培への適応が望まれている。そこで、半促成作型での栽培適応性を明らかにするため、採苗時期、苗床の施肥量及び保温開始時期について検討した。

2. 試験方法

- (1) 採苗時期と苗床の施肥量：採苗時期は7月25日、8月25日の2回とし、苗床のN施用量をa当り0.7（基肥0.5，追肥0.2），1.4（基肥1.0，追肥0.4）kgとしてそれぞれを組み合わせた。なお、追肥は表-1のとおり行い、保温開始時期を11月20日として検討した。
- (2) 保温開始時期：採苗時期を8月20日とし、11月20日、12月1日及び10日に保温開始して検討した。

3. 試験結果及び考察

- (1) 採苗時期と苗床の施肥量では処理間における生育差はほとんど認められず、また、頂花房、えき花房の開花及び収穫始期の差も少なかった。収量は株当り358～376gの範囲で、7月25日採苗・苗床N施用量a当り1.4kgがやや多収の傾向を示したが、処理間差は少なく、各処理とも4月10日で収穫果はほとんど皆無となった。
- (2) 各保温時期の低温遭遇時間（5℃以下）は表-3のとおりで、低温量の増加とともに生育はおう盛となった。開花及び収穫始期は早期保温ほど早く、11月20日保温開始では開花始期12月15日、収穫始期1月29日であったのに対し、12月10日保温は1月6日及び2月19日とそれぞれ約20日程度遅れたが、その差は保温時期の差とはほぼ一致した。
収量、1果重とも11月20日保温でやや優れる傾向がみられたが、処理間差は少なかった。

4. 成果の要約

女峰の半促成作型は促成栽培より収量は劣るものの、2～3月どりを目標とした栽培適応性は高いと思われ、この場合の保温開始時期は生育状況から判断して、5℃以下の低温遭遇時間で200～400時間の範囲にあるものと推察された。なお、この作型では採苗時期や苗床施肥量の収量に対する影響は少ないと考えられる。

（担当者 栃木分場 植木正明）

表-1 採苗時期及び苗床のN施用量が開花におよぼす影響

採苗	処 理		追肥時期(月日)			開花始期		頂花房	葉柄長 cm
	基肥	追肥	8.25	9.8	9.16	頂花房	えき花房	着花数	(1月29日)
7.25	0.5	0.2	0.2	-	-	12.14	1.6	2.14	7.7
	1.0	0.4	0.2	0.2	-	15	6	2.24	7.3
8.25	0.5	0.2	-	0.2	-	13	6	2.34	7.5
	1.0	0.4	-	0.2	0.2	10	6	19.6	8.2

表-2 採苗時期及び苗床のN施用量が収量におよぼす影響

採苗	処 理		収穫始期		月別収量 (g/株)					1果重
	基肥	追肥	頂花房	えき花房	1月	2月	3月	4月	計	g
7.25	0.5	0.2	2.6	2.26	18	207	125	10	360	146
	1.0	0.4	7	3.1	4	216	139	17	376	15.4
8.25	0.5	0.2	4	2.26	14	205	138	10	367	15.6
	1.0	0.4	7	24	20	194	123	21	358	15.5

表-3 保温開始時期が生育・収量におよぼす影響

保温開始 月日	低温量 (時間)	葉柄長 cm	開花 始期	収穫 始期	月別収量 (g/株)					1果重
					1月	2月	3月	4月	計	g
11.20	193	8.3	12.15	1.29	10	205	148	15	378	15.4
12.1	321	10.5	23	2.5	4	154	187	18	363	14.7
10	435	15.6	1.6	19		47	297	21	365	14.9

注 低温量は5℃以下の積算時間で、葉柄長は保温2か月後。

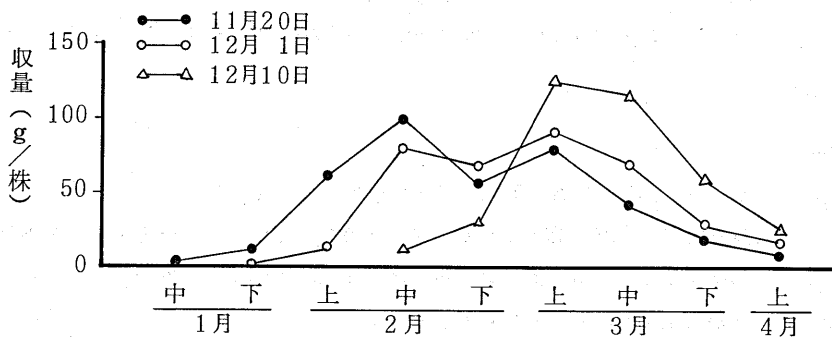


図-1 保温開始時期と収量の旬別推移